

比較文化論

No. 38

日本比較文化学会第42回全国大会
2020年度国際学術大会
発表抄録

於 北九州国際会議場

2020年9月5日（土）

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

淡江大学村上春樹研究センター

台湾日本語教育学会

（協賛）

北九州市

（公財）北九州観光コンベンション協会

日本比較文化学会第 42 回全国大会・2020 年度国際学術大会

理事会関係者会議

日時：2020 年 9 月 4 日（金）

編集委員会：15:00～ 北九州国際会議場 22 会議室

理事会：16:00～ 北九州国際会議場 22 会議室

日本比較文化学会第 42 回全国大会・2020 年度国際学術大会プログラム

会場：北九州国際会議場（北九州市小倉北区）

スケジュール：

9 月 5 日（土）

8:45 受付開始

9:10～9:50 総会及び理事会（国際会議室）

10:10～11:40 シンポジウム（国際会議室）

テーマ：「比較文化の教育実践」

13:00～16:50 研究発表（2 階及び 3 階会議室）

17:00～17:10 閉会式（国際会議室）

懇親会は、諸般の事情により、中止といたします。

9 月 6 日（日） エクスカーション（希望者のみ）

発表される方はご自分のパソコンをご持参くださいますようお願いいたします。Mac を使用される場合は、接続用アダプターを各自でご用意ください。また、研究発表でレジユメを使われる場合は、20 部をご自身でご用意ください。

シンポジウム

10:10～11:40 国際会議室

シンポジウムテーマ：「比較文化の教育実践」

司会：

九州支部／中国四国支部より：岩松 文代（北九州市立大学教授）

パネリスト：

1. 関東支部／東北支部より：

小林 竜一（江戸川学園取手中・高等学校教諭）

比較文化の教育実践

—高等学校における国際教育プログラムの運用と高大連携の可能性—

2. 中部支部／関西支部より：

田島 喜代美（浜松学院大学助手）

大学生によるフェアトレードの取り組み

—「送り先地域」と「受け入れ地域」が連携した地域課題の解決に向けて—

3. 韓国日本文化学会より：

趙 恩英（韓国・釜山外国語大学助教授）

学期末レポートから見られるタンデム学習について

4. 台湾日本語文学会より：

頼 錦雀（台湾・東呉大学特聘教授）

比較文化の教育実践

—東呉大学日本語文学科キャップストーンの場合—

5. 台湾日本語教育学会／淡江大学村上春樹センターより：

落合 由治（台湾・淡江大学教授）

「比較文化の教育実践」としてのテキストマイニング

研究発表（オンライン）

オンライン第1会場

1部 12:30-14:00

公文 素子（高知大学非常勤講師）

「やさしい日本語」で書かれた防災パンフレットの理解度について
—留学生を対象にした調査を参考に—

馮 荷菁（九州大学大学院）

中国国内の日本語教科書におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの指導
—『総合日本語』『標準日本語』『新編日本語』の3種の教科書を中心に—

夏 逸慧（東北大学大学院）

「笑い」に関する役割語の日中対照研究

2部 14:10-15:40

郭 麗（東北大学大学院）

日中基本色彩語「赤」「紅」の比喩的意味の拡張メカニズムに関する研究

張 琦（九州大学大学院）

身内に対する感謝表現の使用：日中対照分析

銭 蕾（大阪大学大学院）

中国におけるヤオイ愛好者のBBCドラマ『SHERLOCK』の受容—BBCドラマ『SHERLOCK』と
コナン・ドイルの小説—

3部 15:50-17:50

上杉 裕子（県立広島大学教授）

グローバル人材を育成するための国際交流イベント開催とその効果検証

村岡 桂子（元名古屋学院大学大学院）

途上国からの帰国子女に関する事例研究

董 航（元お茶の水女子大学大学院）

藤井懶斎の『孝』教育実践におけるジェンダー差についての考察

津村 公博（浜松学院大学教授）

海外につながる子どもの言語・文化資源の開発

—「送り出し地域」と「受け入れ地域」によるICT海外協働学習の取り組みについて—

オンライン第2会場

1部 12:30-14:00

藤田 香織（広島経済大学講師）

TEM図を用いた英語スピーキングの抵抗感分析

高橋 栄作（高崎経済大学教授）

津軽弁の音声認識

YUAN XIN（大阪大学大学院）

1920年代から1930年代までの女性用海水着の実態—露出をめぐる—

2部 14:10-15:40

横道 誠（京都府立大学准教授）

前向きが無力さ、ハイパーパワー、超意味—フランクフルト思想から当事者研究へ
山口 裕美（津山工業高等専門学校准教授）

バイロンの『ハムレット』受容と思想にあたえた影響

坂元 敦子（神戸女子大学准教授）

三島由紀夫とテネシー・ウィリアムズの交流と影響について

3部 15:50-17:50

堀 秀暢（津山工業高等専門学校非常勤講師）

感覚を揺さぶる試み—キャロル作品が生み出す知覚

井内 千紗（拓殖大学助教）

ポリグロシアの翻訳に関する比較文化的一考察

—ベルギー・オランダ語圏の現代小説を事例に—

木下 律子（創価大学大学院）

Harry Potter シリーズにおける死生観の確立

—宮崎駿『風の谷のナウシカ』との比較—

Takayo Sugimoto (Professor, Aichi University Junior College)

How do Japanese Students' Short-Term Study Abroad Experiences Affect their
Academic Task-Values?

オンライン第3会場

1部 12:30-14:00

森下 一成（東京未来大学教授）

沖縄本島における差屋型の神アサギについて

—大宜味村・謝名城の事例をもとに、加計呂麻島の事例等との比較を通じて—

吉田 亜矢（会津大学短期大学部講師）

母親の対人的行動特性に関する一考察

高橋 正（創価大学教授）

ハロウィーンとお盆—死生観の比較文化学的観点から—

2部 14:10-15:40

郭 潔蓉（東京未来大学教授）

外国人人材の受け入れ拡大とダイバーシティ・マネジメントの変容

藤原 まみ（山口大学准教授）

海外移住者と日本在住者との情報共有と文化的アイデンティティ形成について

—周防大島町沖家室島発行『かむろ』分析を中心に—

3部 15:50-17:20

田中 真奈美（東京未来大学教授）

パラオ出身の日本人の民族的アイデンティティ

ウォント盛 香織（甲南女子大学准教授）

国際養子となった戦後混血児研究

—母親の視点から：金子和代『エミーよ』をケーススタディに—

佐藤 知条（静岡産業大学准教授）

映像にみる「桜田プラン」の展開

—1949年の映画「こどもグラフ」の内容の分析を中心に—

杉本 雅彦（東京未来大学教授）・金塚 基（東京未来大学准教授）

・岩崎 智史（東京未来大学講師）

高等学校における応援団の応援技法に関する考察—発声技法に焦点をあてて—

研究発表（北九州国際会議場）

第1室（2階21A会議室） 1部 13:00-14:00 2部 14:10-15:40 3部 15:50-16:50

1部司会：北林 利治（京都橘大学教授）

黄 如萍（台湾・国立高雄餐旅大学准教授）

日影丈吉「ねずみ」論

曾 秋桂（台湾・淡江大学教授）

AI テキストマイニング技術による『コンビニ人間』読みの多様化

2部司会：篠原 征子（北九州市立大学大学非常勤講師）

呉 雪虹（台湾・高雄市立空中大学助理教授）

発表辞退

漱石と『莊子』『ついでに』を中心に—

范 淑文（台湾・台湾大学教授）

震災文学にみる日本文化の一端—岩手県出身作家の311への注目

葉 凌（台湾・淡江大学助理教授）

環境文学として読む村上春樹文学

3部司会：中村 友紀（関東学院大学教授）

邱 若山（台湾・静宜大学教授）

佐藤春夫の異文化体験、理解と表象

—台湾、中国、バリ島の舞踊、音楽、絵画などについて—

頼 錦雀（台湾・東呉大学特聘教授）

中日対訳から見る台日言語文化の相違—黄春明「戦士、乾杯！」を例に—

第2室（2階21B会議室） 1部 13:00-14:00 2部 14:10-15:40 3部 15:50-16:50

1部司会：金志 佳代子（兵庫県立大学教授）

吉村 理一（九州大学助教）

日英語通訳・翻訳における否定呼応現象

橋尾 晋平（京都大学非常勤講師）

明示的文法指導とフォーカス・オン・フォームに基づく文法指導の比較

—日本人初級英語学習者における日本語の主題卓越型構造による転移の克服に向けて—

2 部司会：佐藤 和博（弘前学院大学教授）

深津 勇仁（慶応義塾大学 SFC 研究所上席所員）

クリント・イーストウッドと米国異文化表象～コーパスと言語の視座から～

山崎 祐一（長崎県立大学教授）

異文化理解を視野に入れた内容重視の英語教育が学習者の発信力の向上にもたらす効果

武富 利亜（岐阜薬科大学教授）

イシグロ小説に描かれる「沈黙の暴力」

3 部司会：深津 勇仁（慶応義塾大学 SFC 研究所上席所員）

藤枝 善之（同志社大学嘱託講師）

英語教育に映画字幕を活かす

Aoi Maeda (Graduate School of Kyoto University)

The Impact of Using Memrise and “Memes” on Japanese EFL learners

第 3 室 (2 階 21C 会議室) 1 部 13:00-14:00 2 部 14:10-15:40 3 部 15:50-16:50

1 部司会：栢山 剛（鳥羽商船高等専門学校准教授）

関口 英里（同志社女子大学教授）

新たな「文化の仕掛け」の探究と創造—伝統とビジネスのプロデュースをめぐって

楊 吟雨（同志社大学大学院）・田口 哲也（同志社大学教授）

同時代アイドル文化の文化論的分析

2 部司会：砂川 典子（九州ルーテル大学准教授）

栢山 剛（鳥羽商船高等専門学校准教授）

1968 年におけるアメリカのベトナム戦争政策（米国大統領選挙とのかかわりの中で）

周 聖来（横浜外国語学校アーキヴァイブズ顧問）

発表辞退

澳門の異文化適応過程に関する探査的検討—南蛮貿易とキリスト教を中心に—

李 惠慶（大阪経済法科大学研究員）

北朝鮮・「慰安婦」・歴史—長編推理小説『4つの氷』におけるジェンダー表象と繰り返される女への暴力の果てに—

3 部司会：澤田 敬人（静岡県立大学教授）

向野 康江（茨城大学教授／東北大学大学院）

明治 5 年「学制」における「算画」の設定—科目名の淵源を探る—

入江 良英（精華女子短期大学教授）

「一般教育」「道德教育」の根源としての「阿弥陀仏」について

第 4 室 (2 階国際会議室) 1 部 13:00-14:00 2 部 14:10-15:40 3 部 15:50-16:50

1 部司会：山内 信幸（同志社大学教授）

陳 志文（台湾・国立高雄大学教授）

「へと+動詞」構文についての考察—変化動詞を中心として—

梶原 雄（同志社大学嘱託講師）

国語に関する世論調査の日韓比較

2部司会：伊藤 豊（山形大学教授）

大谷 鉄平（北陸大学国際交流センター講師）

宣伝文に用いられる語句の商用的作用—雑誌記事見出しにみられる「評判」の場合—

落合 由治（台湾・淡江大学教授）

AI テキストマイニング技術による言語ジャンルのテキスト的特徴

奥村 訓代（同志社女子大学非常勤講師）

諺文型分類と日本語教育への応用

3部司会：大谷 鉄平（北陸大学国際交流センター講師）

石川 隆男（台湾・台湾大学非常勤講師）

「南仏文芸復興と台湾文学 在台日本語文壇の郷土主義」

朴 秀浄（大阪大学招へい研究員・韓国聖潔大学校非常勤講師）

韓国における性欲学の輸入と性的アイデンティティの形成

—日本の性科学受容と比較して—

国際会議室 10:10～11:40

比較文化の教育実践

—高等学校における国際教育プログラムの運用と高大連携の可能性—

小林竜一（江戸川学園取手中・高等学校教諭）

グローバリズムが席捲して久しい昨今、中等教育機関であれ、高等教育機関であれ、学生・生徒募集活動に裨益するという前提に立脚し、国際社会に寄与する人材の育成を提唱する教育機関の例は、枚挙に遑がない。無論、かねてより「世界型人材の育成」を標榜する発表者の勤務校も、その例外ではない。たとえば、同校においては、およそ30年間の長きにわたり、オーストラリアでのホームステイ型プログラムが実施されてきたことなどはその顕著な一例である。さらに同校では、OBやOGをはじめとする人的ネットワークを駆使してハーバード大学やマサチューセッツ工科大学といったアメリカの名門大学を訪問し、研究者として活躍する同校の卒業生と懇談する機会が設けられている。そしてコロナウイルスの瀰漫で中止の憂き目に遭ったが、今年度に企画されたイギリスでの大学訪問や現地校との交流などは、この線に沿った動きである。

しかし、ホームステイであれ、大学・学校訪問であれ、いわゆる「先進国における現地観光型プログラム」は、いずれも旅行代理店が主導するという意味で実施校の主体性が問われることに加えて、参加生徒の一時的な精神的な高揚をもたらすための企画にとどまるものではなかったか。あるいはまた、生徒募集の観点からみても、従来の「先進国における現地観光型プログラム」は、グローバル教育の必要を提唱する教育機関の企画としてはすでに陳腐化の誹りを免れないのではあるまいか。

そうした問題点に鑑み、本報告では、勤務校の国際教育推進委員としての立場から、事前学習、東南アジア諸国での現地研修、および事後学習が不可分にして一体をなす課題発見・解決型国際教育プログラムの意義について比較文化の視点から考察することを通じて、プログラムの成立には不可欠の要因と思われる「高大連携の可能性」を追求したい。

国際会議室 10:10～11:40

大学生によるフェアトレードの取り組み
—「送り先地域」と「受け入れ地域」が連携した地域課題の解決に向けて—

田島喜代美(浜松学院大学助手)

1. 研究の背景

浜松市内に滞在する義務教育年齢期に相当する外国籍の子どもの数は、平成20年をピークとして減少に転じた。平成20年以降、南米日系の子どもの数は減少しているが、フィリピンの義務教育年齢期の子どもの数は増え続けている。

2. ダバオ市内の公立学校への支援

浜松学院大学の学生は、フィリピン共和国・ダバオ市をフィールドとした研修¹の中で、地域格差、経済格差、社会格差を学んでいる。

3. フェアトレードへの取り組み開始

- (A) 現地仲介者からフェアトレード商品を買付ける。
- (B) ダバオ市マリログ地区のバヤニハン小学校を訪問し、バヤニハン小学校の協力のもと、生産者より商品を直接買付ける。
- (C) バヤニハン小学校の家族からバヤニハン小学校の協力のもと、輸入を開始する。

4. 大学生によるフェアトレードの分類

	流通過程
A	国内フェアトレード販売事業者より商品を購入する
B	国内フェアトレード販売事業者より商品の委託販売契約を行う
C	現地仲買人を通して、商品を輸入する
D	現地に赴き、仲介者から商品を買付ける
E	現地に赴き、生産者(団体)から買付ける

5. 地域課題の解決に向けたフェアトレードの意義

- (A) ダバオ市内の公立学校に在籍する家族及び子どもを支援するフェアトレードを通して、日系フィリピンの子どもの生活、教育、福祉を学ぶことが可能である。
- (B) 浜松市は日系フィリピンの子どもの多くが居住する地域であり、「送り先地域」であるダバオ市公立学校と連携する意義を「受け入れ地域」へ伝えることが重要である。

6. 今後について

- (A) サステイナブルな世界の実現「SDGs」として、これらフェアトレードの取り組みを大学生から、小・中学生へ派遣授業を通して伝えていく。
- (B) 大学生による新しい仕組み、新しい価値を作り出すことで、ビジネスを手段とした地域課題の解決に取り組んでいく。

¹ 浜松学院大学は、文部科学省「大学教育再生加速プログラム (AP)」のテーマIV「長期学外学修プログラム (ギャップイヤー)」を採択され、フィリピン共和国教育省 Region XI と教育・研究・地域貢献を目的として協定を締結した。

国際会議室 10:10～11:40

学期末レポートから見られるタンデム学習について

趙恩英（韓国・釜山外国語大学助教授）

本発表は、言語学習と異文化理解のためのタンデム学習を受講した学習者が授業の最終日に作成したレポートの内容から、タンデム学習により、何を学び、何を気づいたかを分析したものである。釜山外国語大学では、2011年から日本語・韓国語タンデム教科目を開設している。タンデム学習が始まってから、約10年がすぎている。2019年には、日本語と中国語を含め、14カ国語²のタンデム学習が行われている。これまでタンデム学習を用い、外国語教育や異文化理解などの観点で研究がなされてきているが、学習者が書いたレポートを検討し、学習者がタンデム授業で学んだことについて考察したものはない。そこで、本発表では、学習者が書いたレポートから、学習者が思っているタンデム学習の良い点と改善点を述べる。

分析の結果、タンデム学習で学んだ点と良かった点について、日本人学習者は、韓国文化と韓国語、人間関係について学び、50分間、韓国語だけ使用できたことを挙げている。一方、韓国人学習者は、普段よく使わない単語を学び、自分の抑揚について直してもらい、受身形などについて学んだと、日本語についての言及が多かった。

改善点について、日韓学習者が共通に挙げている項目は、日本語・韓国語母語話者でありながら、母語についてうまく説明ができない知識の足りなさを挙げている。違いとしては、日本人学習者は、学んだ目標言語について復習や勉強の足りなさ、相手に質問しつづけられないという自分側からの行動や態度の消極性を挙げている。一方、韓国人学習者は、もっとパートナーとの交流ができなかったことを述べている。

感想として、日本人学習者は、母語以外で会話することに大変さと楽しさを感じたという意見、自分の韓国語の実力とパートナーの日本語の実力を比べ、韓国人学習者のレベルの高さに驚き、それに刺激され、頑張るようになったという意見、自分の足りない部分に気づき、冬休みや日本へ帰国してからも、韓国語の学習に頑張りたいという意見、タンデム学習で学んだことを今後の留学生活に生かしていきたいという意見を挙げている。一方、韓国人学習者の場合、4年生の学習者は卒業を迎え、思い出として、日本人の友達ができうれしいという意見、1学期という短い期間に飛躍的に日本語力が伸び、目標言語の日本語の学習において、タンデム授業は転換点となったという意見を挙げている。また、タンデム学習から外国人とのコミュニケーションにいい影響になったと述べている。

以上、タンデム学習を通じ、日本人学習者は、何よりも韓国語が話せるチャンスや韓国語学習の刺激となり、韓国人学習者は、日本人との交流のチャンスとなったということが明らかになった。

² フランス語、スペイン語、トルコ語、ロシア語、ヒンディー語、ミャンマー語、マレーシア語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語、中国語、日本語、英語、マルチーリング語である。

国際会議室 10:10～11:40

比較文化の教育実践
—東呉大学日本語文学科キャップストーンの場合—

頼錦雀（台湾・東呉大学特聘教授）

大学におけるキャップストーン・プログラム（Capstone Program）は、1990年代に、米国において考案された、公共政策・公共行政分野における実践的教育プログラムである（地域公共人材大学連携事業(2012) 「キャップストーンプログラムマニュアルーキャップストーンプログラムの実践と課題」による）。台湾では、大学教育の総仕上げとして、最終年次に行われる授業になっている。そして、21世紀を生きるために世界各地で色々なコンピテンシーが提出されたが、台湾でも基礎力、国際力、就業力、創新力、教育力、奉仕力、越境力の必要性が発表された。東呉大学では上述したことを参考に、カリキュラムイノベーションの一環としてキャップストーンのことを考案され、日本語文学科では「總結日本語文」科目が設けられた。

東呉大学日本語文学科大学部のキーコンピテンシーは（1）日本語の聴解力、発話力、読解力、書写力、翻訳力、（2）日本事情の理解力、（3）国際的視野と異文化交流能力である。そして、「總結日本語文」は大学部四年生のための授業であるが、その目的は、学生が今まで身に付けた日本語力を生かして、日本語、日本文学、日本文化に関する様々な課題に関するプロジェクトを企画し、実際に想定した問題を想定し、情報の収集、分析及びそれに基づくプロジェクトの実践と効果を評価することにある。履修生はプロジェクトの成果をまとめ、レポートを作成し、プレゼンテーションを行う。

発表者が担当するキャップストーンの授業は、台日比較文化が主な内容である。台日比較文化に興味のある学生のための授業であるので、台湾における日本景観、日本語景観、旅先へのイメージ、台湾人の対日観、就活、終活、ACGから見た日本文化、命名と文化、恋愛観、結婚観、祝日とお祭り、飲食文化などについてケースメソッドの形で学生に考えさせながら、研究課題の選定、プロジェクトの企画を指導する。自選課題については学生同士の協働の形で小論文をまとめさせ、口頭発表をさせる。このように日本語教育を通じて台日異文化理解能力と交流能力を学生に習得させ、優れた台日交流人材育成を目指して努力している。

本発表では、筆者が担当するキャップストーン授業における台日比較文化の指導内容及び学生がまとめたレポートを中心に報告したいものである。

キーワード：台日比較文化、キャップストーン、コンピテンシー、ケースメソッド、
東呉大学日本語文学科

国際会議室 10:10～11:40

「比較文化の教育実践」としてのテキストマイニング

落合由治（台湾・淡江大学教授）

台湾には世界有数の規模の日本語学習者が存在し、日本語文学語学を教える大学の学科も多数存在してきた。しかし、現在、急速な少子高齢化とグローバリズムによる社会変動の進行で、大学の多くは統廃合が避けられない状態となり、同時に職業的可能性の減少で日本語関係学科への進学者も減少しつつあり、今までの日本語習得だけを目的にしたカリキュラムや人文系学科だけを中心にした研究内容から踏み出して、今後の新しい方向性を求める必要に迫られている。

そこで、本学科の有志教員で日本語自然言語処理の技術を取り入れて、新しい教育内容や研究方法の革新ができないかを昨年から勉強会等を開いて、摸索してきた。その中で、社会学、心理学、教育学、経営学などに採り入れられているテキストマイニングの技法が人文系の研究や教育に活かせるのではないかと考え、試行錯誤を行い、また、台湾の日本語教育関係者に呼びかけてシンポジウムを開催し、日本から自然言語処理の専門家を招聘して講演を依頼し、台湾でできる研究発表をおこなって、新しい分野との接続を探ってきた。

現在、テキストマイニング技法の人文系研究への応用の中で、中心的課題にしているのは、テキストマイニング技法のテキスト(言語単位としての文章・談話)の質的研究への応用である。今回の発表では、資料の質的読解の結果と、テキストマイニング結果とを比較して、原資料の中でどこに焦点がそれぞれ当たっているのか、また、相互の関係性はあるのかについて検討し、文学・語学・教育など人文系研究へのテキストマイニング技法の応用可能性について考えていきたい。

テキストマイニングは、言語の差異を越えて、一定の数理的方法で分析結果を出せるため、比較文化研究には極めて有益な示唆をえることができる可能性がある。たとえば、文学作品であれば原語作品と翻訳作品の比較、メディア記事であれば同一テーマでの各国の記事比較、論説・評論であれば同一テーマの論説での各国比較など、人文社会系の比較文化研究に極めて客観的な分析結果を提示できる。本パネルディスカッションでは、文学作品、メディア記事の比較分析の結果を例にして、これらを教育現場に活かす方途を考えてみたい。

オンライン第1会場
1部 12:30-14:00

「やさしい日本語」で書かれた防災パンフレットの理解度について
—留学生を対象にした調査を参考に—

公文素子（高知大学非常勤講師）

2008年5月高知県国際交流協会ⁱが南海トラフ地震に備えるために外国人を対象に、6か国語（英語・中国語・韓国語・タガログ語・ベトナム語・インドネシア語）とやさしい日本語（日本語能力試験 N4 レベル）で書かれた防災パンフレット（初版）ⁱⁱを発行した。その後、多様化する在留外国人に対応するため、2014年9月に5言語（英語・中国語・韓国語・ベトナム語・インドネシア語）につき「通常版」と「概要版」の2種類の防災パンフレットが改訂・発行された。「通常版」は、永住者や日本人配偶者など主に長期在留者向けで、情報量は初版と同程度である。また、「概要版」は留学生や技能実習生など短期在留者向けで、災害に対して必要最低限の情報をまとめている。しかし、言語や資格に対応した防災パンフレットが改訂・発行された一方で、在留1年未満の外国人や日本語を十分に理解できない外国人に対応した「やさしい日本語」の防災パンフレットは、予算不足により改訂・発行されなかった。

2020年2月の気象庁ⁱⁱⁱの発表によると、南海トラフ地震が今後30年以内に発生する確率は70%~80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から70年以上が経過し、切迫した状態であることがわかる。この発表から、いつ起こるかかわからないが必ず発生する南海トラフ地震に備え、6か国語以外の言語話者に対するやさしい日本語での防災情報の発信は必要不可欠である。

本発表では、やさしい日本語での情報が必要な在留1年未満もしくはN4レベルの日本語学習者に対して、やさしい日本語で書かれた現存の防災パンフレットの理解度を調査すると同時に、高知市防災士連絡協議会に於ける日本人への理解度を含め高知市の予算不足でカットされた「やさしい日本語」改定バージョンを模索し、今後の短期外国人に対する防災の取り組みの指針を発信・提供する。

ⁱ 高知県国際交流協会：<http://www.kochi-kia.or.jp/home.html>

ⁱⁱ 高知県国際交流協会 防災パンフレット：<http://www.kochi-kia.or.jp/event/>

ⁱⁱⁱ 国土交通省 気象庁：<https://www.data.jma.go.jp/svd/eew/data/nteq/index.html>

オンライン第1会場

1部 12:30-14:00

中国国内の日本語教科書におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの指導
— 『総合日本語』『標準日本語』『新編日本語』の3種の教科書を中心に—

馮荷菁（九州大学大学院）

従来、敬語体系とスピーチレベル体系を有していない中国語を母語とする日本語学習者にとっては、上級になってもスピーチレベルを対話相手や場面に応じて使い分けることはなかなか難しい。その原因は、学習者側と指導者側（日本語教師と教科書）にあると思われる。そこで、本研究では、中国国内の日本語専攻の大学生が使用される3種の教科書『総合日本語』『標準日本語』と『新編日本語』を分析資料とし、そこに現れるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトに関する指導の共通点と相違点について考察を行った。

その結果、丁寧体と普通体の導入、スピーチレベル・シフトの導入という2点に関して、どの日本語教科書も共通して初級で提示していることが観察された。一方、スピーチレベルの説明の仕方、スピーチレベルに関する練習、スピーチレベル・シフトの説明、スピーチレベル・シフトに関する練習といった点に関して、数多くの相違点がみられた（詳しい結果は紙幅の関係、省略）。

これらの結果から、スピーチレベルに関する日本語教育への留意点として、1) 初級では、スピーチレベルの導入とともに、それに関する明示的な説明を付け加える、2) スピーチレベルに関する簡単な説明の他、実際に場面と人間関係の設定のある会話練習が期待される、3) 中級以降では、人間関係（相手との親疎関係と上下関係）とスピーチレベルの運用練習が重要である、4) 高級では、丁寧体基調の会話における普通体の使用と機能を深く理解してもらえるために、場面と人間関係設定のある会話練習が必要不可欠である、という4点が挙げられる。

また、スピーチレベル・シフトに関する日本語教育への留意点として、1) 初級では、スピーチレベル・シフト（ダウンシフトとアップシフト）の導入とともに、それらに相応する明示的な知識も提示することが必要である、2) 中級では、スピーチレベル・シフトの定義説明のほかに、ダウンシフトとアップシフトの両方の機能も明示的に提示することが必要不可欠である、3) 中級以降では、スピーチレベル・シフト（ダウンシフトとアップシフト）の運用練習が必要である、という3点が挙げられる。

オンライン第1会場

1部 12:30-14:00

「笑い」に関する役割語の日中対照研究

夏逸慧（東北大学大学院）

本研究は、日本語のマンガに出てくる笑い声表記の音声的な要素は特定な人物像（性格、年齢など）と緊密に結び付いている一方で、中国語の場合、笑い声表記とキャラクターの設定と共通している部分があるが、動物の鳴き声や種名などの役割語に関しては直接的な特徴づけが行われているわけではないということを主張する。

金水（2003）の出版以降、役割語関連の研究が盛んに行われ、音韻・語彙・文法・韻律上の要素と特定の人物像の関係性が徐々に明らかになってきた。住田（2019）はマンガに出てくる笑い声表記が特定の人物カテゴリーと結びつき、役割語としての機能を有していることを確認した。しかし、人称表現や文末表現については深く論じられてきた一方で、「感動詞」や「笑い声」という音声的な要素との対照研究を行っているものは少ないようである。また役割語としての笑い声表記を無視してその作品を正しく理解することは難しいため、日中言語における笑い声に関する研究の必要性があると考えられる。

そこで、本研究は笑い声表記が顕著に用いられるマンガ『ONE PIECE』に着目し、両国語版から集めた笑い声表記を研究の対象として、特定の人物像と笑い声表記の使用にどのような共通点と相違点があるのかを明らかにすることを目的とする。分析方法として、役割語的要素「年齢」、「性別」、「容姿」「性格」などに基づいて分析する。分析対象は主に臨時的な語頭要素を持つもの（ゼハハ）、有声音、硬口蓋音を持つもの（シュッポポ）臨時的な二音節反復形（ホロホロ）である。以下の2点を解明した。

日本語の役割語としての笑いの表現は1)濁音や硬口蓋音という音声的な要素はキャラクターの身体に関する視覚イメージが根強く、内面的な性格にも深く関係している。2)母音要素は性別、年齢や人種などにも一定の特徴を与えている。3)語頭要素は「悪役らしい」外見上の特徴と「卑しい」内面的性格の組み合わせパターンを巧みに表す。

- 1) 体格と性格 a. 濁音 丸い； /g/、/b/ 激しい豪胆, /p/ 軽率さ陽気
b. 硬口蓋音/CyV/ 細身、長い;好戦, 残忍
- 2) 性別、年齢と品種 a. 母音/u/女性、オカマ； b. 母音/o/男性、高齢者； c. 母音/i/動物
- 3) 敵キャラ a. 母音/e/野望、非情、； b. 母音/u/警戒心、残酷、両面性

両言語の相違点について、日本語には強烈な個性を主張するような笑い声表現の役割語度が相当高く、動物の鳴き声や種名などの語呂合わせを利用した動物系とゾンビ系などの笑い声表記（ex. 猫人族「ゴロニャニャ」）が生産的である。中国語には、このような体系的な方法が存在しないが、「動物の鳴き声+笑い声表記」というパターンが役割語として使われることも観察される。しかし、日本の特有の妖怪や伝説上の動物を発話キャラクター（河童の笑い声「カッパッパ」）としての中国文化と一致する人物像がはっきりしていないから、翻訳しにくいところがみられる。

オンライン第1会場

2部 14:10-15:40

日中基本色彩語「赤」「紅」の比喩的意味の拡張メカニズムに関する研究

郭麗（東北大学大学院）

本稿では日本語と中国語における基本色彩語「赤」「紅」を取り上げ、認知言語学の観点から、日中色彩語「赤」「紅」の多義的な意味の拡張メカニズムを解き明かし、その意味の全貌また意味拡張のプロセスの異同を提示することを目的とする。日中色彩語「赤」「紅」はどのように視覚領域から社会文化領域と心理認知領域に拡張するかを明らかにするために、本研究では複数の日本語と中国語の辞書を調べた上、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)、『北京言語大学 BCC コーパス』から例文を抽出し、谷口（2003）らによるメタファー・メトニミー・シネクドキの定義に基づいて考察を行った。それから、瀬戸（2007）の意味展開モデルを参考し、「赤」「紅」の各意味用法の関連性を意味のネットワークで説明しようと試みた。

色彩語について様々な先行研究が行われた。周（2015）は日中基本色彩語「黒」の比喩的意味の拡張を検討したが、どのようにメタファー、メトニミー、シネクドキ的な意味用法を判断するのかが明確ではない。そこで先ず本研究における判断の基準を定める。瀬戸（2007）によると、メタファーの意義展開パターンは「形態類似」「特性類似」「機能類似」の三つがある。シネクドキは「類で種を表す」「種で類で表す」の二つがある。また、メトニミーは「原因で結果」「プロセスで結果」「全体で部分」などの34種類に分けられる。本研究では瀬戸（2007）の意義展開パターンを参考に考察を行った。例えば次の日本語の例を見てみよう。

例1. 赤面する。

例1「赤面する」は、「顔が赤くなる」ということを意味するだけではなく、「恥ずかしい」や「怒り」などのような感情も表している。「恥ずかしい」や「怒り」などのような感情は原因となって、その結果、顔が赤くなると解釈できる。そのため、「赤面する」は結果で原因を表すメトニミーの用法であると考えられる。また、日中社会文化などの違いによって、色彩語の意味の違いも見られる。例えば下記の中国語の例を見てみよう。

例2. 唱红脸儿。

例2の「唱红脸儿」は元々京劇で顔が赤く隈取る善玉を演じる役者を指すが、現在では普通の生活にもよく使われる。例えば、子育てする夫婦、一人は優しい役（白脸）、一人は厳しい役（红脸）を演じる。この用法は日本語には見られなかった。

本研究の結果は、まず、中国語の「赤」「紅」の意味用法は日本語と比べて、使用範囲が広いことが分かった。そして、色彩語「赤」「紅」の意味は視覚領域から、社会文化領域、心理認知領域に拡張する際、社会文化領域は主にメトニミーによって拡張し、心理認知領域は主にメタファーによって拡張することが分かった。最後に、日中色彩語「赤」「紅」の意味拡張の差異は主に社会文化領域にあると結論づけた。

オンライン第1会場

2部 14:10-15:40

身内に対する感謝表現の使用：日中対照分析

張琦（九州大学大学院）

「感謝する」という行為はさまざまな社会の中で普遍的に行われる。言語や文化によって異なるものと共通のものがある。より円満な人間関係を行うために、状況・場面・相手との関係を考慮して適切な言い方をしなければならない。

日中ともに多様な感謝表現が使用される。「ありがとう」のような直接感謝表現のほかに、「気持ちの表明、プラス評価、謝罪、返済/お返しの約束、相手の負担に関する言及、相手の不可欠性に関する言及、自分の利益に関する言及」のような間接感謝表現が挙げられる。「責め（反語）」という中国語の独特の表現を除けば、日本語・中国語における感謝表現の種類が非常に似ていることが指摘されている（張 2020）。しかし、ある場面においてどの表現がどれだけ頻繁に使われるかは会話参加者の関係、負担の軽重、文化によって異なる。特に、中国では家族に対してあまり感謝の気持ちを口に出さないとよく言われる。ところが、質的データに裏付けられた分析がまだ見当たらない。

本研究は待遇表現の理論に基づいて、異なる文化背景と言語体系を持つ日中両言語における実際の会話資料を用いて、身内に対する場合に様々な感謝表現がどのように使用されているのか、詳しい談話分析を行った。さらに違いが分かりにくい項目に対して音声分析ソフトを使い、その違いを可視化して説明した。

その結果、日本語と中国語の相違点は主に3つ挙げられる。中国語では〈1〉言語行為の不使用 〈2〉直接感謝表現+人称代名詞「例：谢谢妈妈（ありがとうお母さん）」の使用 〈3〉責め（反語）の使用。この結果は今後の言語教育や異文化教育に示唆できればと考えられる。

オンライン第1会場

2部 14:10-15:40

中国におけるヤオイ愛好者のBBCドラマ『SHERLOCK』の受容 — BBCドラマ『SHERLOCK』とコナン・ドイルの小説—

銭蕾（大阪大学大学院）

ヤオイとは、一般的には、男性同士の恋愛関係を描いた女性向けの小説、マンガ、アニメ、ドラマCDやゲーム、映画などの創作物を指し、近年ではBLという呼称でも知られている。ヤオイは日本を起源とする50年近い歴史を持ち、日本独特のサブカルチャーとされているが、現在では日本にとどまらず、異なる言語と文化を持つ海外でも人気を得ている。中国におけるヤオイは、1990年代に日本のヤオイに影響を受けて広まり始め、現在では幅広く浸透している。またそれは日本のコンテンツのみならず、さまざまな地域および世界の作品や有名人などのコンテンツと関連しており、主に女性が主導する越境的かつ包括的なファン文化になっている。

ヤオイ愛好者は男性同士の恋愛をテーマとしたコンテンツ以外に、男性キャラクターたちをメインとする非ヤオイ作品も積極的に愛好し、ヤオイ物語として消費する。例えば、イギリスのBBCドラマ『SHERLOCK』シリーズ（2011年からの放送）はイギリスにて放映後、中国大陸においても話題作となっており、特にヤオイ愛好者の間で大人気となっている。ヤオイ愛好者たちは、BBCドラマ『SHERLOCK』シリーズを探偵物語として鑑賞しながら、男性同士の恋愛物語としても積極的に消費している。ヤオイ愛好者は物語に対する、男性同士の関係性に関心を寄せるという独特の読み取り方によって楽しむことができるのである。本研究では、このような読み取りの仕方を「ヤオイ愛好者の解釈」と呼ぶ。

今日に至り、ヤオイ愛好者は多様な非ヤオイコンテンツに対してヤオイ的な解釈を行うが、その際にとりわけヤオイ愛好者に好まれる作品が存在している。例えば、同じくホームズとワトソンの事件解決を描写する作品の中でも、コナン・ドイルの小説より、BBCドラマ『SHERLOCK』が圧倒的にヤオイ愛好者に好まれ、解釈され、莫大な二次創作のやおいに仕上がっていくのである。ではなぜこのような現象が生じるだろうか。本発表では、BBCドラマ『SHERLOCK』とコナン・ドイルの原作の小説を比較することで、男性キャラクター間の恋愛が描かれない作品の中で、ヤオイ愛好者に好まれる要素を分析する。具体的には、ホームズとワトソンの初対面の場面を用い、ドラマと小説の相違点を比較することで、BBCドラマ『SHERLOCK』が中国のヤオイ愛好者に好まれる理由を明らかにし、どのような非ヤオイコンテンツがヤオイ愛好者に興味を引くのかを検討し、またそれらは中国におけるヤオイのファン文化とどう関連しているのかについて考察する。

オンライン第1会場

3部 15:50-17:50

グローバル人材を育成するための国際交流イベント開催とその効果検証

上杉裕子（県立広島大学教授）

現在、グローバル人材教育がさまざまな教育機関でさまざまな形で進められてきている。では、グローバル人材とはどのような人材なのか？文部科学省は、グローバル人材を「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」と定義している。

さらに、文部科学省はグローバル人材の概念を整理し、次の3つの要素を挙げている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

グローバル人材の第1要素として、語学力、つまり、国際コミュニケーション手段としての英語運用能力が挙げられている。

私は英語教員として、学生がなかなかうまく英語を話せるようにならない現実を見てきた。英語授業で私はオールイングリッシュのイメージ教育を実践してきたが、文部科学省が要素Ⅲでも求めているようなグローバル人材教育には、もはや授業の工夫だけでは、不可能であるように感じた。グローバル人材を育成するためには、実際の経験が必要ではないか。実際に英語を使う場を創り出し、学生に提供し、失敗や苦勞を重ねながら、語学力を養えるような「仕掛け」が必要ではないか。そうでなければ、学生の英語習得に関するモチベーションはなかなか向上しないし、ましてや異文化理解など程遠い存在となる。

留学が一番の近道なのかもしれない。しかしみんながみんな、留学できるわけではない。家庭の事情や経済的事情により、すべての学生たちが海外留学することは難しい。

そこで、過去8年間、前任校である某高専において、学生が実際に英語を使う場を創造し、環境づくりに努めた。国際交流室員として、さまざまな国際交流イベントを学内外で他機関と連携しながら開催した。ある意味、「仕掛け屋」である。その際、国際交流イベントが、学生のマインドをいかに刺激することができるかを目の当たりにし、大きな衝撃を受けた。国際交流イベントは学生にとって疑似留学体験となり、その結果として、失敗などのマイナスの要素を持っていようとも、英語や異文化に対する姿勢が大きく変化したのである。

本発表において、国際交流イベント開催の実践例を紹介し、それが英語学習および異文化理解に対し、いかなる変化を学生にもたらしたかについて、学生アンケート結果を分析しながらその効果を検証したい。

オンライン第1会場

3部 15:50-17:50

途上国からの帰国子女に関する事例研究

村岡桂子（元名古屋学院大学大学院）

1. 研究の背景

帰国子女に持つイメージはネガティブなものから、ポジティブなものまで、さまざまである。近年のグローバル化により増加し続ける帰国子女は、自らのアイデンティティをどのようなものと捉えているのだろうか。半構造化面接を行い、途上国で学んだ帰国子女のアイデンティティはホスト国の文化に影響されるのか、または使用言語に影響されるのかなど、主にアイデンティティやセルフイメージに関するコメントを分析する。

帰国子女が帰国後の不適応などに苦しまず、高い自己肯定感を持ち、その後の生活を豊かなものにする鍵は何かを分析結果から考察していく。

2. 調査方法

半構造化面接を調査対象者に約2時間行った。対象者は三人兄弟の長子であり、父母ともに海外勤務経験が豊富である。1993年に生後数か月でネパールに渡り、小学校は現地のインターナショナルスクールに入学して5年生まで過ごした。2006年に5年生でエジプトへ転居する。そこでは日本人学校へ転入して中学二年生まで過ごした。いったん日本に帰国し、2か月ほど公立学校へ在学したのち、2007年にラオス人民民主共和国へ転居する。ここでは現地のインターナショナルスクールへ転入し、同時に日本語補習校へも転入する。2009年、I高等専門学校へ入学し専攻科まで進み、T大学大学院へも進学している。2017年より、日本国内の企業へ就職し現在に至る。

自分自身についてどう思うか、他人はどう見ているか、自分の経歴は今の生活にどう作用しているかなどを聞き取り、コーディング、カテゴリー分けを行って分析する。

3. 考察

主に以下の点を中心に考察する。

- ・帰国子女の中でも「途上国から」という点で、欧米諸国からの帰国子女の場合との違いがあるのか。
- ・帰国子女からみた日本の学校や教育とはどんなものであるか。
- ・帰国子女という経験をどのようにとらえているか。またそれが実際に役立った場面はあったのか。

オンライン第1会場

3部 15:50-17:50

藤井懶斎の『孝』教育実践におけるジェンダー差についての考察

董航（元お茶の水女子大学大学院）

朱子学者・藤井懶斎は、京都閑唱寺の僧・了現の子として元和三年（一六一七）に生まれ、宝永六年（一七〇九）七月に九十三歳で没した。名は臧、字は季廉、通称は玄蕃、別号に伊蒿子、懶斎、よもぎが杣人などがある。長寿に恵まれた彼の人生は、五十八歳で致仕する時点までの前半生を仕官期、それ以降の後半生を隠棲期として分けることができる。懶斎は京都で岡本玄治に医学を学んだ後、二十六歳の頃から筑後国久留米藩（現在の福岡県久留米市）に医者として仕え始めた。久留米藩において、懶斎は藩医としてのみならず、儒者として有馬家の系図調査や和歌指導などの文事にも携わることを命じられた。朱子学の探求に没頭し自ら儒書を読んで解釈するなかで、懶斎は人間の本性を覆うものを取り払い、それまで彼にとって余技だった儒学に専念し聖人の道へ近づくことが、本来、人間の歩むべき道であると悟り、致仕帰郷を決意した。延宝二年（一六七四）の秋、懶斎は久留米を離れ三十年以上の藩医としての仕途を終え、京都へ戻り隠儒生活に没入した。この頃から、懶斎はもっぱら超然と聖賢の道を楽しみ、旺盛な著述出版活動に取り組んでいた。還暦を過ぎてから最期を迎えるまでの三十年余りの人生のなかで、教訓の仮名草子『蔵笥百首』、『仮名本朝孝子伝』、『二礼童覧』、勸善書『大和為善録』、和歌類『竹馬歌』、随筆雑記『睡余録』など広く読まれる著作を多く残した。

『仮名本朝孝子伝』は漢文で書かれた懶斎『本朝孝子伝』を漢字平仮名交じり文に改めたものであり、『本朝孝子伝』刊行後に寄せられた反響に答えるという一面も持っていた³。そして、『二礼童覧』は儒教儀礼の書として仏式葬祭に対抗するために書かれたものである。『蔵笥百首』は懶斎が妻を亡くし、残された女兒の教育のために著したものであり、百人一首や八代集から歌を選び、歌の解釈と共に「婦道」を説いたものである⁴。

孝思想との関係から見れば、『本朝孝子伝』は懶斎が孝の観念を重んじる儒者としての所作であり日本の親孝行話（事例集）を蒐集・掲載したものである。『二礼童覧』に表現された儒教儀礼も実は親に対する孝の実践のためのものであって、両者はいわば同じコインの表と裏なのであるという⁵。一方で、懶斎の教訓物には、ジェンダーに関係なく男女に共通する記述と、性差で相違する記述がある。しかし、こういったジェンダー視点による考察は従来の懶斎研究においてはあまり行われてこなかった。本発表の目的は、藤井懶斎が著した教訓書に見られる孝に関する記述を整理・比較することによってジェンダー視点から見た彼の『孝』教育実践の有り様及びその背景を明らかにすることである。

³ 勝又基「元禄期教訓本研究」九州大学、博士論文、2001年。

⁴ 二見田鶴子「『蔵笥百首』翻刻と紹介」『大倉山論集』（44）、pp. 289-348、1999年。

⁵ 吾妻重二「藤井懶斎『二礼童覧』について——「孝」と儒教葬祭儀礼」『関西大学中国文学会紀要』（37）、pp. 1-22、2016年。

オンライン第1会場
3部 15:50-17:50

海外につながる子どもの言語・文化資源の開発
—「送り出し地域」と「受け入れ地域」による ICT 海外協働学習の取り組みについて

津村公博（浜松学院大学教授）

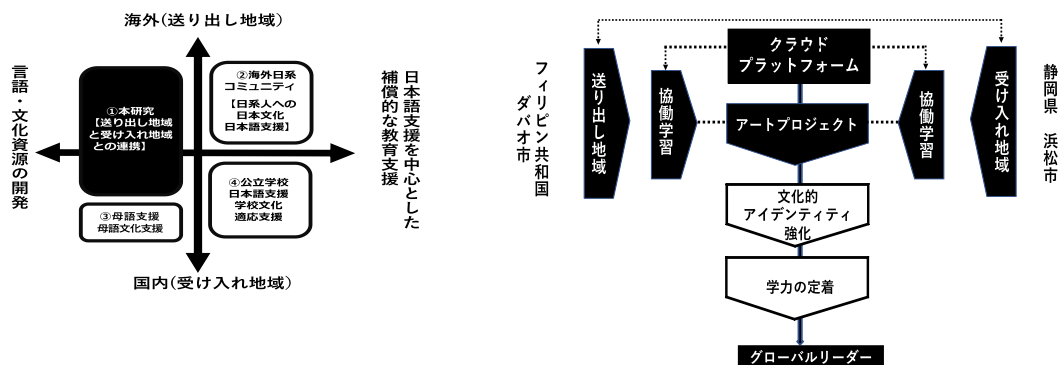
1. 背景

1990年の改正入管難民法以来、浜松市には多くの日系人労働者が流入した。学歴期の子どもを帯同する者も多く、公立学校文化に適応できず学力が定着できない子どもも多くなる。

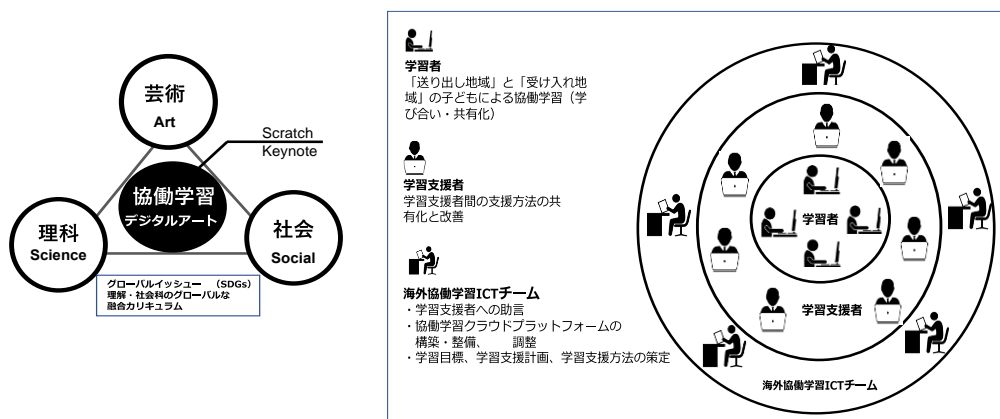
2. 研究の目的

学力不振から教育現場を離れる海外につながる子どもが、将来のグローバル人材へと転換させる要因となる学力移動に影響を与える文化的アイデンティティの強化を促す教育方法を明らかにする。

3. 研究の独自性と ICT 海外協働学習の概念的フレームワーク



4. アイデンティティの形成を支える協働学習型カリキュラムと協働学習モデル



5. 結果

2019年に浜松市とダバオ市の子どもが参加する海外協働学習を7回実施し、浜松市内のフィリピンにつながる子どもは延べ28人、ダバオ市内から延べ68人が参加した。課題と成果を報告する。

オンライン第2会場

1部 12:30-14:00

TEM図を用いた英語スピーキングの抵抗感分析

藤田香織（広島経済大学講師）

本研究では抵抗感の低い学生13名にインタビューを行った。英語スピーキングの抵抗感が下がった理由を分析することが目的である。ここでは抵抗感の低い学生を留学経験者・海外プロジェクト参加経験者であることと1週間のうち3日は留学生と英語を話す機会を積極的にもつ学生としている。インタビュー内容は幼少の頃・小学生から英語に触れた経験があるか、中学生・高校生での英語の取り組み等、どのようなきっかけが英語を話すようになったのか自由に話してもらった。特に英語を話すことに抵抗感がなくなったと感じたきっかけを中心にインタビューを行い、13名のインタビューから似たような経験をしている4名を選択し、更に3回以上のインタビューを行い、その内容をTEM図にしている。

TEM図とは、Trajectory Equifinality Modelを図にあらわしたもので、日本語訳では複線径路・投資モデルとされている。個人の経験を時間と共に描き、インタビューのデータを線や経験を書き加えて作成するものである。安田・サトウ(2012)はTEMは時間を捨象せずプロセスとして人間の発達や人生径路をとらえる方法論としている。より詳細に焦点をあてるべき箇所を抽出してTEM図を作成することにより、関心をもっている現象を複眼的・多面的にとらえることができると主張している。その時々での社会的な影響や個人の環境などに左右されながら人の考えは変化していく。時を丁寧に考えることで調査協力者と社会状況や個人の置かれた状況を詳しく振り返ることができ、また調査協力者の等至点を置くことで抵抗感の高い学生が至らなかった理由を考えることができる。そしてどのような経験が必要なのか改めて考えることができる。

今回は4名の学生のインタビューをTEM図に起こした理由は、安田・サトウ(2012)の中に複数人のデータをまとめる方法の中に類似性のある3~4名に絞ってデータを分析する方法が記載されていたからである。インタビューの人数に関しては1・4・9の法則(荒川・安田・サトウ, 2012)がある。調査協力者が1名の場合は、個人の経路の深みを探ることができる。4±1名の場合は、経験の多様性を描くことができる。本研究の場合、多様性を求めているため4名に絞ることにした。インタビューの度にTEM図を修正した。

今回インタビューを行った英語スピーキングの抵抗感の低い学生には共通している点がある。どの学生からも聞いた言葉が「英語が通じた時はとても嬉しかった」であった。数名のTEM図にも英語が通じる喜びが出ているが、自分の英語が通じた時は自信がもてるきっかけとなる。そして必ずしも性格の明るい学生が英語を話せるようになるとは限らないことである。WTCでは本人の性格が大きく影響をあたえるとある。しかし異国の地で何とか活動をやっていかなければならない時に、現地の人々が心を開いて優しく繰り返し話しかけてくれる行動に、人によるが大人しい学生もリラックスして話し始め、繰り返し英語を話す環境に身を置けば英語を話せるようになることがあることがわかった。

オンライン第2会場

1部 12:30-14:00

津軽弁の音声認識

高橋栄作（高崎経済大学教授）

UNESCOは2009年、「Atlas of the World's Languages in Danger」を発表し、世界でおよそ2500の言語が消滅の危機にあり、日本でもアイヌ語を含め8つの言語がその中に含まれているとした(UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger; ことば研究館 ことばの波止場 Vol. 5)。また、言語の基本は意思の伝達であるが、言語が一元化してしまった場合の懸念を、2001年 UNEP 閣僚級環境フォーラムで、テプファー国連環境計画事務局長が「伝統、文化の継承を支えてきたことばを失うことは、自然の貴重な教科書を失うことに等しい(ことば研究館 ことばの波止場 Vol. 5)」と述べるように、文化を継承していくためには地域言語を守る必要がある。特に「方言主流社会(佐藤和之他 2003)」では地域言語と共通語(東京方言)の役割の違いを認識し、多文化・多言語共生のための手段が必要である。そこで本研究では、以下のような特徴のある音声特色(佐藤和之他 2003)を示す津軽地方の方言を分析し、その音声特色を認識するシステムと多文化・多言語共生のための手段の構築を目指す。

(1) 母音の無声化

- a. あたし → あタし *(カタカナの表記がささやき声になる)
- b. くし → クシ (佐藤和之他 2003)

(2) カ・タ行子音の有声化

- a. あける → あゲる (ibid.)
- b. はた → はダ (ibid.)

(3) シとスの区別がつかない

- a. シチュー → スチュー
- b. してください → ステください

本研究の調査、分析の方法は次の通り。津軽弁(単語)の音声データを集め、音声分析ソフトPraatを使用してそのデータを分析する。Praatでその各々の音声データのサウンドスペクトログラムを取得する。そのサウンドスペクトログラムの画像を用いて、機械学習を行う。機械学習では、Pythonのscikit-learnの機械学習ライブラリを使用する。機械学習により、音声の認識を容易に行うことができれば、多文化・多言語共生の国語教育が容易に行えることを提案する。

参考文献

佐藤和之他. (2003). 青森県のことば. 明治書院. 東京.

木部暢子. (2019). ことば研究館. ことばの波止場. Vol. 5

<https://kotobaken.jp/digest/05/d-05-02/> アクセス 2020. 1. 2.

オンライン第2会場

1部 12:30-14:00

1920年代から1930年代までの女性用海水着の実態—露出をめぐる

えんきん
YUANXIN (大阪大学大学院)

「海水着」とは、海水浴や水泳の時に着る衣服のことである。

日本において、女性が本格的に海水着を着用し始めたのは1880年代以降のことである。それ以降、様々な海水着が製造されていった。また、海水着による露出度も変化していった。具体的にいえば、初期は長袖かつ足首丈の海水着を着用していたが、1910年代になると、主に半袖かつ膝上丈の海水着を着用するようになり、それ以降、襟なし袖なしかつ太もも半分以上を露出する海水着が流行した。

1920年代以降、海水着による露出をめぐる議論が盛んになっていった。また、露出する部位によって賛否両論の意見が見られる。具体的には、泳ぎやすさの観点から腕や、足、背部の露出が比較的早く認められた。それに対して、乳房の露出は否定的であった。

その一方で、ほぼ同時代に映画や宣伝写真に、美の代表だといわれていた映画女優の海水着姿が現れ始める。それに加え、メディアは女優の海水着姿を「露出美」と結びつけて宣伝した。それらに影響され、大衆の間では海水着による身体の露出が美と認識され、広まっていった。

その結果、1930年代がメディアで「露出時代」と名付けられ、「露出美」のある海水着が次々と発表された。たとえば、背部の露出が多い海水着、いわゆる「バックレス」がその一例である。しかしながら、日本人女性が実際に着用していたのは「露出美」のある海水着よりも、露出を抑えた海水着だったことを報道する新聞記事が多く見られる。つまり、メディアで宣伝されていた海水着と、当時の日本人女性が実際に着用していた海水着の間には、違いがあったという可能性が考えられるのである。

本発表では、1920年代から1930年代までの海水着の露出をめぐる議論を取り上げ、女性の身体の露出に対して、どの部位がどのように論じられてきたのかを考察する。そして、「露出美」が広まっていった過程の中で、映画女優およびメディアが果たした役割について分析し、メディアで宣伝されていた海水着と、当時の日本人女性が実際に求めた海水着の間に違いが存在した可能性についても述べる。

オンライン第2会場

2部 14:10-15:40

前向きの無力さ、ハイヤーパワー、超意味—フランクフル思想から当事者研究へ

横道誠（京都府立大学准教授）

問題の当事者が仲間と協力して、各自の問題を掘りさげ、その問題が発生する仕組みを解明することで、生きづらさを緩和する。この形態の精神療法が「当事者研究」として脚光を浴びている。本来は統合失調症の患者に適用されていたもので、直接的には2001年に北海道にある「浦河べてるの家」で生まれた。以後、20年間のあいだに普及と発展が進み、現在では当事者研究は、さまざまな生きづらさを軽減する有力な手法として注目されている。発表者自身も、コロナウイルス対策のための緊急事態宣言下で、オンラインを通じた実践をおこなうようになった。

「当事者研究」の歴史については、成立に深く関わった向谷地生良が好んで言及してきたほか、2016年以降、東京大学先端科学技術研究センターの当事者研究分野で歴史的整理が進み、2020年にはメンバーの綾屋紗月による歴史記述が「当事者研究の歴史——障害者運動と依存症自助グループの出会い」として発表された（『メンタルヘルスの理解のために——こころの健康への多面的アプローチ』、ミネルヴァ書房）。この歴史記述のなかで綾屋は、一方では「力を取り戻す」ことを目指した障害者運動の実践があり、他方では「無力を認める」ことを目指した依存症自助グループの実践があって、両者が合流することで、「前向きの無力さ」に支えられた当事者研究が成立したという図式を示している。

発表者はこの図式に説得力を感じ、綾屋の歴史記述から多くを学びもしたが、さらに重要な歴史的要素を追加することができるし、それによって「当事者研究の歴史」の歴史的位置づけがより鮮明になるとも考えた。その歴史的要素とは、ドイツの精神科医ヴィクトール・E. フランクフルの思想を指す。向谷地が好んで言及するものの、当事者研究の歴史でまだ位置づけが曖昧なフランクフルについて考察することで、当事者研究の歴史を大きな文脈に置くことができるようになる。

本発表は、フランクフルの思想の「超意味」に関する考察をおこない、そこには当事者研究の「前向きの無力さ」と密接に連絡する発想があることを示す。考察の過程で、綾屋がやはり言及しなかった依存症自助グループの「ハイヤーパワー」の観念についても思考をめぐらせることになるだろう。國分功一郎の「中動態」研究や、熊谷晋一郎（前述した東京大学先端科学技術研究センター当事者研究分野の責任者）によるこの研究への言及も参照する。綾屋による当事者研究の歴史的図式を補完し、かつ当事者研究をさらに立体的に理解できるようにすることを、本発表はめざしている。

オンライン第2会場

2部 14:10-15:40

バイロンの『ハムレット』受容と思想に於いた影響

山口裕美 (津山工業高等専門学校准教授)

ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の書簡のなかには、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の作品を受容したことを示す記述が数多く残されている。例えば、四代悲劇 (『ハムレット』 (*Hamlet* (1600))、『オセロ』 (*Othello* (1604))、『リア王』 (*King Lear* (1605))、『マクベス』 (*Macbeth* (1606)) はもちろんのこと、喜劇、悲劇を問わず、折にふれては言及し、自らの思想の一部にしていることがわかる。また、バイロンが執筆した作品のエピグラフに、シェイクスピア作品からの引用をみることができる。

そこで本稿は、タイトルに掲載しているとおりバイロンの『ハムレット』受容を読み解くことを目的としている。バイロンの劇詩『マンフレッド』 (*Manfred* (1817)) は、後世の文人 (作家や哲学者を含む) や画家、作曲家に多くの影響をあたえてきた作品であるが、本作品のエピグラフには、『ハムレット』からの引用がある。この引用は、デンマークの王子が持つ性質の一部をマンフレッドが継承している、あるいは『ハムレット』の世界観の一部を『マンフレッド』が引き継いでいることを作品の冒頭で暗示する効果を持つ。ここでは、『マンフレッド』と『ハムレット』の間テキスト性を意識するとともに、バイロンの書簡のなかで言及される『ハムレット』について注目し、詩人の思想に於いた影響を考察する。

オンライン第2会場

2部 14:10-15:40

三島由紀夫とテネシー・ウィリアムズの交流と影響について

坂元敦子（神戸女子大学准教授）

テネシー・ウィリアムズといえば『ガラスの動物園』(1944)や『欲望という名の電車』(1947)などの作品を思い浮かべる人が多いことだろう。これらウィリアムズの代表作は今も世界各地で上演され、多くの観客を魅了しつづけている。

一方、従来あまり注目されることのなかった後期の作品も、最近評価されるようになった。そのひとつといえるのが『男が死ぬ日』である。この作品は完成後、未発表のままウィリアムズ自身によって UCLA に売却され、長らく注目されなかったが、その後 2007 年にアメリカで初演され、昨年(2019 年)夏にはプロヴィンスタウン、また東京でも上演された。

『男が死ぬ日』は、上記代表作のように滅びゆくアメリカ南部をモチーフとしたり、詩的表現や繊細さを特徴としたりするものではない。同じ作家のものとは思えぬほど不条理劇的な要素を持つ作品であり、またこの作品には、**Oriental** という明らかに三島由紀夫をモデルとした人物が登場する点も大きな特徴である。

『男が死ぬ日』の執筆を始める直前、ウィリアムズは三島と出会い、その後ふたりは親交を深めた。日本と米国にお互いを何度も訪ねたことなどはウィリアムズ研究者にはよく知られている。ふたりは作家として影響を与え合い、とくにウィリアムズの後期作品には三島の影響が見られると指摘されている。

しかし一見しただけでは明らかな共通項を見つけることが難しいこのふたりの作家は、実際に影響を与え合ったといえるのであろうか。この点について考える際、そもそもふたりに共通する要素や共感などがあったのかという点について考える必要があると思われる。

本発表ではふたりの交流の軌跡を辿り、その生い立ちを比較し、代表作を比較するなどしてふたりの間に何らかの共通点もしくは共感などがあったかどうかを考えてみたい。とくに、作品における登場人物の比較によって、両者の価値観における共通項にも注目したい。

三島とウィリアムズの交流や互いの影響について考察することは、ウィリアムズの後期作品をよりよく理解する上で重要であると思われる。『男が死ぬ日』に加えて『東京のホテルのバーにて』等の作品にも焦点をあてながら、ウィリアムズが模索した新しい作風がはたして「成功」といえるものだったかどうかについても考えたい。

オンライン第2会場

3部 15:50-17:50

感覚を揺さぶる試みーキャロル作品が生み出す知覚

堀秀暢（津山工業高等専門学校非常勤講師）

本発表は、ルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）の作品を、人間の感覚とそれを知覚する脳や精神のはたらきといった観点から分析する。キャロルは、『心を養う』において精神、つまり頭の方法について記している。こうした点から、彼は作家活動において、人間の頭脳や精神を意識していたことがうかがえる。

キャロルの作品は一般的に「ノンセンス文学」と分類される。「ノンセンス」の定義に関しては高橋によると、「《センス》とは秩序であり、秩序とはであるとすれば、そのような体系を解体するのが、《nonsense》だと言ってもよい。」¹とされる。つまり、人間の生物的感觉である「五感」や、社会的感覺である「常識」が覆される際に、「ノンセンス」の感覺が生じるのである。こうした感覺の破壊には、快と不快の両義的な反応が生じる。カイヨワ（Roger Caillois）は『遊びと人間』において、人間が快と感じる感覺の揺らぎを「遊び」の理論より分析している。彼は遊びを四種に分類しており、それらは、アゴン（競争）、アレア（偶然）、ミミクリ（模擬）、イリンクス（眩暈）といったものである。また彼は、これらの四分類のうち、アゴンとアレア、ミミクリとイリンクスがそれぞれ密接に結びつくことも指摘している。キャロルの作品はノンセンスと分類されるように、感覺の異常（眩暈）であるイリンクスの要素を含むと言えよう。

イリンクスとは、遊園地のジェットコースターやミラーハウスといった、人間の三半規管を意図的に狂わせる遊びといったものである。こうした点から、感覺に異常を生じさせるノンセンス文学における快感は、イリンクスの遊びと共通しているのだ。

また、キャロルの作品においては、カイヨワが指摘するように、イリンクスと結びつくミミクリの要素も存在している。例えば、『不思議の国のアリス』における章、“A Caucus-Race and a Long Tale”では、水に濡れた登場人物たちが身体を乾かすために徒競走を行う。この際、「競争」と名前がついてはいるが、実際は「競争」に必要な条件である、始まりと終わりが決まっていない。つまり、実際の競争を「模した」何かが行われているのだ。キャロルの作品は、こうした、「既知のものに似ているが何か異なっている」といった奇妙な感覺、ミミクリとイリンクスが融合した感覺を生じさせる。彼の作品における要素である「ノンセンス」、「ミミクリ」および「イリンクス」は、それぞれ異なる見出しを持つが、共通して人間の感覺にはたらきかけるものである。

キャロルの作品はその全体において、「意図的な感覺の異常」が根幹をなしている。こうした感覺を生じさせるための情報元となる作品要素を明らかにしたい。同時に、その情報を受け取った人間の脳や精神が、どのような仕組みで「ノンセンス」を筆頭とした感覺を生じさせているのかといった、脳のインプットとアウトプットの関係性について検討したい。

1 高橋康也『ノンセンス大全』（晶文社、1982年）14。

オンライン第2会場

3部 15:50-17:50

ポリグロシアの翻訳に関する比較文化的一考察
—ベルギー・オランダ語圏の現代小説を事例に—

井内千紗（拓殖大学助教）

オランダ語は、日本の近代化に大きな影響を与えた言語である。蘭和翻訳に関する研究は、18世紀に始まった蘭学を軸に、言語学・歴史学・政治学・法学など、様々な分野において研究の蓄積がある。しかし、現代の蘭和翻訳に目を向けると、言語学の分野も含め、未だほとんど研究されていないのが現状である。オランダやオランダ語圏を有するベルギーは、世界の中でもグローバル化が進んだ国家として度々上位に名があがっており（*e.g.* Gygli et al., 2019）、それらの国や地域における言語表現の翻訳を通してグローバル社会における文化を知ることは、異文化理解の観点から一考に値すると発表者は考える。

本発表ではオランダ語圏の中でも、特にベルギーの現代小説に着目する。同国は言語境界線を境に、フランス語圏、オランダ語圏、ドイツ語圏、そしてフランス語とオランダ語の二言語併用圏が並存する多言語国家である。言語事情は現実社会だけでなく、芸術文化の言語表現にも影響を与えており、それが、ポリグロシア（多言語の使い分け）の形になって現れる。作者自身は創作過程において地域性や言語の使い分けを意識せずとも、翻訳者の視点では、ポリグロシアはオランダのオランダ語文学とも一線を画す、地域文化的特徴として解釈する必要がある。複雑な言語事情を背景とするポリグロシアという起点文化を、日本語に翻訳する際、どのようなストラテジーが必要なのだろうか。

上記の視点から、本発表ではまず、日本におけるオランダ語文学受容の状況を概観した上で、ベルギー文学の日本語訳による異文化理解の役割を示す。次に、現代小説において、オランダ語以外の言語がどのように使用されるのか、いくつか事例をあげながらポリグロシアのコンテキストを確認する。最後に、アンネリース・ヴェルベークの長編小説『ネムレ!』を事例に、ポリグロシアという起点テキストに見られる文化的側面を、単一言語使用の文化的背景を有する日本語を用いてどのように再表現すべきか、文化的差異に着目しながら、コンテキストの検証をもとに3つのストラテジーを提示する。以上の考察を通して、ポリグロシアの翻訳においては、言語そのものよりも文化の差異の程度が翻訳ストラテジーを左右することを明らかにする。

【参考文献】

- Gygli, Savina, Florian Haelg, Niklas Potrafke and Jan-Egbert Sturm (2019) 'The KOF Globalisation Index – Revisited', *Review of International Organizations*, 14(3): 543-574. <<https://doi.org/10.1007/s11558-019-09344-2>> [2020年5月30日確認]
- Verbeke, Annelies (2003) *Slaap!*, De Geus.
- ヴェルベーク・アンネリース(2018)『ネムレ!』井内千紗訳, 松籟社.

オンライン第2会場

3部 15:50-17:50

Harry Potter シリーズにおける死生観の確立
—宮崎駿『風の谷のナウシカ』との比較—

木下律子（創価大学大学院）

J. K. Rowling の *Harry Potter* シリーズでは、幼い頃に両親を亡くし、その後多くの友人を失った主人公 Harry の人生を通して、死生観の問題に言及される。

これまで、*Harry Potter* シリーズにおける死生観については、キリスト教の「復活」との関連性に注意が向けられてきた。しかし原作では死者の蘇りが明確に否定されており、死後の魂が救われる手段は存在しない。Harry がキリスト教的死生観を持たないならば、いかにして彼の死生観は確立され、死の苦悩を克服することができたのであろうか。

宮崎駿の『風の谷のナウシカ』においても、多くの人々の死が描かれる。主人公のナウシカは、生きる意味に疑問を抱き、確固たる死生観を追求する。

両作品の終盤において、主人公は自己の死の問題に直面する。これまで Harry は死後、復活したと捉えられてきた。しかし『風の谷のナウシカ』と比較すると、両作品の主人公が、死後の世界であると誤解した場所については、“inside your head” (*Deathly Hallows* 591)⁶、“inside your heart” (*NAUSICAA* 220)⁷と述べられており、主人公の「内なる世界」が共通して描かれていることが分かる。

また「内なる世界」において、Harry は亡き恩師である Dumbledore と対話を行う。死後、魂の復活が不可能な世界において、Harry と対話を行う死者の役割を考察することにより、Harry の持つ死生観が明らかになると考える。

本発表では、両作品の主人公が、死生観を確立するに至る共通したプロセスに注目し、*Harry Potter* シリーズで一貫して語られる死生観について明らかにする。

⁶ Rowling, Joanne Kathleen. *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007. p.591.

⁷ Miyazaki Hayao. *NAUSICAA of the Valley of the Wind II*. Translated by David Lewis, Toren Smith. San Francisco; VIZ Media, 2012. p.220.

オンライン第2会場
3部 15:50-17:50

How do Japanese Students' Short-Term Study Abroad Experiences Affect their Academic Task-Values?

Takayo Sugimoto (Professor, Aichi University Junior College)

This study investigated how Japanese tertiary-level students' experiences of studying abroad could affect their motivation toward and perceptions of studying English. We aimed to examine some cultural effects of short-term study abroad programs on individual students, using the academic task-value scale (Ida, 2001).

We conducted questionnaire surveys on a total of 204 students (junior college and university) participated in the study to see some effects of intercultural experiences on their perceptions of and motivations to study English. Among them, 64 students participated in one of the study abroad programs in English-speaking countries: Australia, Canada, or the United States. 140 students were randomly recruited from 8 different majors for the control group. Our surveys were conducted twice, that is before and after their short-term study-abroad programs (T1 in December 2018 and T2 in March 2019). The survey consisted of two parts: the academic task-value scale and open-ended questions. The academic task-value scale was originally developed to measure students' perceptions of and attitudes toward academic tasks provided by teachers in classroom activities or homework assignments. It has five academic task-values and is designed to be evaluated on a seven-point Likert scale: (1) Interest value (e.g., intrinsic motivation), (2) Personal attainment value (e.g., obtaining personal growth), (3) Public attainment value (e.g., obtaining social approval), (4) Practical utility value (e.g., useful for social contributions), (5) Institutional utility value (e.g., useful for passing entrance exams or obtaining jobs).

We statistically analyzed changes in the students' evaluations of the academic task-values between T1 and T2. Our results show no significant changes in the academic task-value patterns among the non-participants of the study abroad programs. By contrast, our results show that the program participants had significantly improved their academic task-value patterns. Their academic-task values had changed so that the proportion of five academic task-values became better-balanced. For example, those who valued less on the public attainment value increased their scores and so on. In addition, the three country groups showed different levels and patterns of the five task-values in the post-program survey (T2). We conclude that the study abroad programs both culturally and individually affect students' academic task values. Some educational implications will be discussed.

オンライン第3会場

1部 12:30-14:00

沖縄本島における差屋型の神アサギについて
—大宜味村・謝名城の事例をもとに、加計呂麻島の事例等との比較を通じて—

森下一成（東京未来大学教授）

1. 本研究の目的

謝名城（大宜味村）集落に現存する神アサギは、沖縄本島に唯一存在する差屋型の神アサギである。本研究の目的は、なぜ謝名城に存在する神アサギだけが差屋型なのか、差屋型の神アサギが多く存する加計呂麻島（鹿児島県）の事例との比較を通じ、明らかにすることにある。

2. 研究の方法

文献調査、現地調査における実見・測量（2018～2019年）及びヒアリングによる。本稿では現地調査についてのみ記載する。

(1) 実見と測量

実見して建築意匠上の特徴を見出し、さらに平面、立面について測量し、寸法体系についても把握した結果を用いる。

(2) ヒアリング

文献調査及び実見と測量を補うものとして、謝名城在住の神人（司祭者）から得たヒアリングの結果を用いる。

3. 調査結果

謝名城の神アサギは、上城（ウイグスク）の神アサギとも呼ばれ、高所にある。聖地である城（グスク）にある神アサギは「グスクアサギ」とも呼ばれ、謝名城の神アサギもそれにあたるが、他のグスクアサギに比して大規模な建築である。また、沖縄本島に存する伝統的な神アサギは、差屋型以外に伏屋型があるが、謝名城以外の平面計画は桁桁と梁桁がほぼ均等となっている。

加計呂麻島における差屋型の神アサギは、阿多地、嘉入、木慈、実久、瀬相、三浦の6集落に存する。これらの神アサギは、謝名城の神アサギとは異なり、集落内に位置し、小規模かつ桁桁と梁桁はほぼ均等である。

4. 考察の端緒として ～今後の課題

考察の端緒として、加計呂麻島に存する6例との平面計画、立面計画による比較を行った上で、沖縄本島における他のグスクアサギとの比較を行い、ウンジャミなどの神行事における用いられ方を含めて、考察の端緒とする。

○参考文献

池浩三『祭儀の空間』1972、津波高志『国頭の村落・上巻』1982、

森下・福島「沖縄島における神アサギ・トゥンの分布と類型及び同一性に関する研究：
神アサギ・トゥンに関する研究 その1」日本建築学会計画系 2005

オンライン第3会場

1部 12:30-14:00

母親の対人的行動特性に関する一考察

吉田亜矢（会津大学短期大学部講師）

背景と目的

保育士に求められる役割として保護者支援がある一方、母親にとって子育ての相談相手が夫や実両親等の近い人間と挙げる母親が殆どであり（吉田, 2017）、子育て支援は近い人間関係によって行っていることが窺える。乳幼児に最も近い存在である母親の影響を考えると、今後は母親自身の特性や傾向にも焦点を当てて調査する必要があるだろう。本研究は、保育者の保護者支援の一助として、蘇(2018)が保育者による保護者支援の困難さとして抽出した、「保護者の性格や態度、病気」「コミュニケーション問題」を母親の対人行動特性と捉え、対人行動特性に起因するものについて検討することを目的とする。

方法

調査対象者：A県B市の幼保連携型認定こども園の母親 275名、有効回答数 201(73.09%)

調査時期・調査期間：2019年7月～8月

調査内容：1) フェイスシート 2) NTI 対人的行動特性

分析方法：統計処理は、統計解析ソフト SPSS Statistics 24 を使用した。有意水準は、** $p < .01$ * $p < .05$ とした。

倫理的配慮：会津大学研究倫理委員会の許可を得た。

結果

1) 母親の対人的行動特性(NTI)の平均値(標準偏差)

愛他性 18.31(4.22)・共感性 19.09(4.01)・論理的思考性 17.04(4.24)・気働き 17.75(4.33)・社交性 15.43(5.22)・養育性 18.53(3.92)、情緒的受容性 56.04(9.86)、思考的繊細性 34.79(7.38)、行動的積極性 32.10(9.10)であった。

2) 母親の対人的行動特性(NTI)と母親がもつ子どもの人数との関連

乳幼児をもつ母親の子どもの人数について一人子か2人以上かに分類し、母親の対人的行動特性との関連について、t検定を用いて検討を行った。その結果、母親の対人的行動特性のうち愛他性($t=2.510$, $df=197$, $p<.05$)、共感性($t=1.9776$, $df=197$, $p<.05$)に有意差が認められた。この結果と平均値を照合すると、2人以上子どもがいる母親は、1人子をもつ母親より、母親の対人的行動特性のうち愛他性と共感性が高いと解釈することができる。

考察

本研究の結果、一人子より2人以上子どもをもつ母親の愛他性と共感性が高かった。母親は複数の子どもの子育て経験をすることで、より個々の子どもの特性の違いを知り、その特性に合わせた関わりをすることで愛他性や共感性が高まると考えられる。

オンライン第3会場

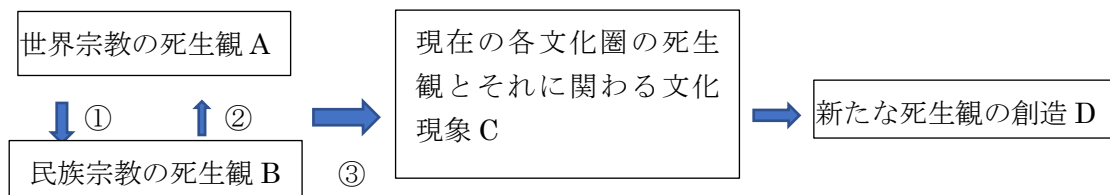
1部 12:30-14:00

ハロウィーンとお盆 —死生観の比較文化学の観点から—

高橋正（創価大学教授）

高橋(2019)では、次のような死生観の比較文化学の構想を示した⁸。

図1



特定の世界宗教が異なる民族へと拡散していくときに、その世界宗教の死生観は、各民族宗教の死生観に大きな影響を与える（①）。その影響力は、世界宗教側が各民族宗教に対してどのように対処したかによって異なる。また、支配的な世界宗教も、各民族宗教から影響を受けて（②）民族独自の死生観を形成する。2つの死生観が相互に影響を与えながら、歴史的な変遷を経て（③）現在において各文化圏で死生観に関わる文化現象(C)が形成されている。Cの文化現象である現代のハロウィーンとお盆を比較する場合には、AとBの比較だけではなく、①と②の相互の影響と③の歴史のプロセスを検討する必要がある。

A～Cにおけるそれぞれの宗教や文化圏の死生観を分析する観点として、さらに、次の6つの項目を提案した。

- i. 霊魂 ii. あの世（他界） iii. 死や死後をコントロールする超越者（神）の存在
- iv. 葬儀儀礼（遺体・遺骨・墓） v. 死後供養 vi. あの世の訪問譚

このような死生観の文化比較の枠組みを設定することによって、異なる文化圏の死生観にかかわる宗教的行事の客観的な比較が可能になる。

ハロウィーンとお盆との比較で特に重要な要素は次の点である。i. の「霊魂」では、霊魂が生者やこの世とどのような関係を持つのか。ii. の「あの世」では、あの世がどこにあると想定されているのか、あの世からどのようにして、また、なぜ戻ってくるのか。v. の「死後供養」では、戻ってきた霊をどのように迎えるのか。

近年、日本でもハロウィーンの行事がさかんになるにつれて、お盆の行事との類似性が指摘されている。しかし、両者の比較する視点に一貫性がなく、表層的な比較に終わっている。上で示したような死生観の捉え方を比較の基準にすることによって多くの興味深い類似性が見いだされると同時に相違性がなぜ生じているのかという点も明らかになる。

⁸ 「死生観の比較文化学構想」 日本比較文化学会 東北・関東合同支部例会 2019年9月7日（神田外語学院）にて

オンライン第3会場
2部 14:10-15:40

外国人人材の受け入れ拡大とダイバーシティ・マネジメントの変容

郭潔蓉（東京未来大学教授）

令和の時代に入り、日本の労働市場をめぐる様相は大きな変化を遂げようとしている。これまで「移民」の存在を認めて来なかった日本政府が、2018年12月8日に「労働移民」の受け入れ政策とも取れる新たな「出入国管理法及び難民認定法及び法務省設置法（以下、「入管法」という）の一部を改正する法案を国会で成立させた。これにより、14業種において外国人労働者受け入れを拡大するための新たな法律が2019年4月1日より施行された。新たな在留資格は「特定技能」と称され、「技能実習」が属する「非専門的・非技術的分野」とは一線を画し、現行の「高度専門職」、「教授」、「技術・人文知識・国際業務」、「介護」、「技能」等が属する「専門的・技術的分野」と同じ括りで在留資格を設置することとなった。

なぜ今外国人労働者の受け入れを拡大しなければならないのか、外国人人材の獲得と雇用にはどのような課題が存在するのか、また、外国人労働者の増加は日本の労働市場、更には日本の多文化社会の形成にどのような影響を及ぼすのか、彼らを受け入れる前に私たちは認識を深めておかなければならない。

「特定技能」の新資格導入に関しては、移民政策につながるのと批判の声も多いが、一方で日本の慢性的な労働力不足の解消につながるのと期待も高い。いずれにせよ、これまでとは異なるセグメントの外国人労働者が新たに14業種の労働現場に参入してくることは日本の労働市場にとっても初めてのことであり、この経験によって日本の労働社会における多文化化が大きく進化を遂げることは間違いないだろう。

では、外国人人材を獲得すれば、日本の労働現場は救われるのだろうか。マネジメントの現場では、外国人人材を獲得出来たとしても、試練はそれだけでは終わらないのが現実である。実際のところ、外国人を雇うということは、日本人を雇うことよりも数倍の労力が必要となる。また、日本における多文化社会の形成にもこれまでにない大きな影響を及ぼすことになる。

今回の入管法の改正の背景には深刻な「人手不足」問題の存在が取り沙汰されているが、本発表では、一体背景にどのような課題が日本社会に潜んでいるのか、まずは日本社会が抱える問題点を明らかにしていきたい。そして、外国人人材獲得の動向と現状の課題を踏まえた上で、2019年4月1日より施行された新たな外国人労働者の受け入れ政策の施行内容を確認し、日本の多文化社会の形成における外国人労働者受け入れ拡大が与える風動やこうした変化が職場におけるダイバーシティ・マネジメントにそのような影響を及ぼすのかについて考察を深めていきたい。

オンライン第3会場

2部 14:10-15:40

海外移住者と日本在住者との情報共有と文化的アイデンティティ形成について
—周防大島町沖家室島発行『かむろ』分析を中心に—

藤原まみ（山口大学准教授）

本研究では雑誌『かむろ』を精査し、その文学的営為について考察する。『かむろ』は山口県周防大島町沖家室島の人々が、1914年（大正3）から1940年（昭和15）まで刊行した雑誌である。『かむろ』は沖家室島在住者と、周防大島町沖家室島出身で国内各地、朝鮮半島、中国東北部、台湾、ハワイ、北米などの海外に滞在している者に、沖家室島の情報や海外在住の沖家室出身者の情報を双方向的に発信した雑誌である。

これまで、この雑誌はほとんど研究されておらず、文学・文化的側面においては、一切分析されていない。本発表では雑誌『かむろ』の文学表象としての意義を検証しながら、大島町沖家室島から海外へと移住した人々の文化的アイデンティティ形成について考察する。さらに、雑誌『かむろ』分析を通じて、大島町沖家室島在住者と海外移住者の間における文化的衝突においても考察したい。

オンライン第3会場

3部 15:50-17:20

パラオ出身の日本人の民族的アイデンティティ

田中真奈美（東京未来大学教授）

はじめに

第一次世界大戦後のパリ講和会議によって、パラオ共和国は日本の委任統治領になった。コロールには南洋庁が設置され、経済開発を行い、病院や道路などが整備された。多くの日本人が新天地を求めて移住し、島の内陸部に瑞穂町、大和町などの日本の町が作られ、学校も建設された。終戦に伴い、パラオ在住の日本人は、パラオから引き上げ、全国8か所の入植地に移り住んだ。その一つが宮城県蔵王町北原尾である。

海外で出生し、成長した日本人の民族的アイデンティティには、独自性があると推測し、その特徴を明らかにするために調査を実施し、結果を分析・考察した。

方法

調査対象者 パラオ島の日本人町で出生し、帰国後、蔵王町に入植した男性3人である。伊藤修（仮名）は、瑞穂町生まれで、4歳の時に帰国した。大友昭（仮名）は、大和町出身で、帰国時は14歳であった。大城一郎（仮名）は、朝日町で生まれ、8歳で帰国した。

手続き

聞き取り調査は、2017年6月に実施し、半構造化面接で行った。調査は、パラオでの思い出、学校教育・環境、帰国時の状況、入植地周辺との交流、北原尾の最盛期、現在の状況などに焦点を当てて行った。分析は、修正版グラウンデッド・セオリーを使用し、パラオ出身の日本人が日本やパラオに対してどのような思いを持っているのか、それが民族的アイデンティティにどう影響しているかに焦点を当て、考察した。

結果・考察

伊藤さんは、「パラオでは、日本人と現地の人が住み分けられていたため、互いに交流することは、ほとんどなかった。北原尾に入植後、最寄りの町が6キロ離れていたこともあり、はじめは距離があったが、徐々に関係性ができ、隣町の住人が親切になっていった」と話してくれた。そういう環境のため、パラオでも日本でもサポートし合う必要があった。

大友さんは、「親戚でもない人々が助け合って、北原尾の町を形成した。議論することはあったが、大きく特に分かれるということではなかった。もともと一匹狼的な人がパラオに移住したということもあり、助け合いの精神ができたことも影響している。1代目の精神が2代目に引き継がれ、現在3代目を中心となり、活動している。この助け合いの精神は、次世代へ引き継いでいかなければならない」という。パラオに移住した人には、共通する独立意識があり、助け合いの精神があったのではと推測できる。

本研究から、日本人のみの町で出生し成長していても、パラオ出身であることは、大切なアイデンティティであり、誇りであることが分かった。また、パラオに移住した人々のパーソナリティやパラオや日本での環境が、影響している可能性が明らかになった。

オンライン第3会場

3部 15:50-17:20

国際養子となった戦後混血児研究— 母親の視点から：金子和代『エミーよ』をケーススタディに

ウォント盛香織（甲南女子大学准教授）

日本が1945年第二次世界大戦に敗戦すると、アメリカを中心とする連合国軍が日本を占領した。この時に起こったことが、日本人女性とアメリカ人兵士の間に多くの混血児が生まれたことである。こうした子どもたちの一部はアメリカに両親と共に行き、一部は日本で両親共から捨てられ、孤児となるものがあり、孤児にならなかったものの、親が育てることができずアメリカに養子縁組された子どももいた。

昨今は戦後混血児に関する研究が進んでおり、多くの書籍が出版されているが、国際養子となった混血児研究は見られず、さらに自分の子を国際養子に出さざるを得なかった母親に関する研究はほぼ皆無である。本研究はこうした研究の空隙を埋めるべく、実子を国際養子に出さざるを得なかった母親の視点から国際養子となった戦後混血児に関する発表を行う。

本発表はまず、母親の視点から国際養子となった戦後混血児について議論する背景として、戦後混血児が生まれた歴史的背景と、混血児のうち、国際養子にどれくらいの数が渡ったのかについて述べる。日本社会が混血児を国際養子に出した日本人女性に対してどのようにまなざしていたのか、当時の言説についても説明する。こうした背景を述べた上で、金子和代の『エミーよ』（1954年出版）に関する分析を報告する。

金子は横浜の米軍基地内で働いていた1950年に、アフリカ系アメリカ人の兵士ジャーニーと出会い恋に落ち、3年間共に暮らし、その間に子を妊娠した。しかしながら、当時のアメリカには排日移民法があり、日本人がアメリカに移民として移民できなかったことや、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が日本人女性とアメリカ軍兵士の結婚を許可しない政策を打ち出しており、日本人女性と関係を持った兵士は本国送還の措置を取られることが多く、ジャーニーも例にもれず本国に帰国してしまった。こうした背景から、金子は一人で娘エミーを産むこととなる。

戦後の日本社会は混血児を持った女性を冷遇し、また金子は健康を害したこともあり、エミーを育てることが困難になったため、エミーを国際養子に出さざるを得なくなる。混血児を国際養子に出した女性を道徳的に墮落した女性たち、と否定的に断罪する言説が1950年代の書物等で見られる中、金子はそうした言説と反する、母親としての強さを『エミーよ』で展開しており、混血児をもった母親の中には、ステレオタイプと異なる母親もいたことを知る上で、貴重な書物である。したがって、『エミーよ』分析を通じ、戦後混血児研究に新たな研究視座をもちこむことが、本発表の目的である。

オンライン第3会場

3部 15:50-17:20

映像にみる「桜田プラン」の展開 —1949年の映画「こどもグラフ」の内容の分析を中心に—

佐藤知条（静岡産業大学准教授）

1947年の学習指導要領一般編（試案）は戦後日本の民主主義教育を推進するための試みの一つとして作成された。序論において「その地域の社会の特性や、学校の施設の実情やさらに児童の特性に応じて、それぞれの現場でそれらの事情にぴったりの内容を考え、その方法を工夫してこそよく行く」と書かれたように、中央（国家）で一元的に教育内容を決めて統制するのではなく、各地域の実情に応じ、学校・教師の創意工夫を生かすべきだという趣旨のもと、各学校では教育課程の編成や教育内容、教育方法の研究が行われ、各学校の名前を冠した「プラン」が多く発表された。

そのなかのひとつに、東京都の桜田小学校の「桜田プラン」がある。同小は前述の学習指導要領（試案）の原案を事前に文部省から貸与され、いち早く研究を実施して実験的な授業を展開した。1947年1月には日本初の社会科の授業として「郵便ごっこ」の実践が公開されるなど、戦後新教育を代表する実践校として扱われてきた。また、数次の改訂に渡る「桜田プラン」の変化や展開についても記録が多く残され、教育史の領域においても注目されてきた。

ところで、「桜田プラン」の時期の同小の教育実践の一部は、1949年に公開された子ども向けの映画「こどもグラフ」（第2号）のなかで紹介されていた。2分ほどの映像のなかには、同小の新聞部が、学校新聞の発行に向けて学内で会議を行い、校外で取材を行い、記事をまとめ、配布するまでの一連の活動が描かれている。

本研究は「こどもグラフ」の映像を分析して同時期における桜田プラン（第4次試案）の展開の様相を明らかにする。そして、戦後学校教育史におけるこれまでの「桜田プラン」の位置づけを確認しつつ、映像の分析によって得られた知見の持つ意味について考察する。

オンライン第3会場

3部 15:50-17:20

高等学校における応援団の応援技法に関する考察 —発声技法に焦点をあてて—

杉本雅彦（東京未来大学教授）

金塚基（東京未来大学准教授）

岩崎智史（東京未来大学講師）

応援を伴うスポーツ観戦の機会は、オリンピックの観戦からスポーツクラブや学校の運動会の観戦にいたるまで多様な関わりがある。東京オリンピックのモットーに掲げられているように、共にスポーツを観戦して自他の所属集団の選手を応援することは、結果として個人における集団との一体感を著しく高め、社会全体の文化的価値や規範などを再生産あるいは創造していくような効果をもつと考えられる。

これまでの日本の伝統的な高等学校には、応援団（指導部）を有する学校が多い。それはチームの勝利や活躍を祈願する応援活動であるが、結果として社会化を強化するメタ機能を有するのであれば、応援団は儀礼的効果を通じた集合的な応援活動を統制する役割を担うエージェントといえる。つまり、応援団の活動には重要な教育的機能が含まれるため、ここでそのような機能に関与するプロセスを考察する意義が生じてくる。

このような学校教育における応援活動のあり方を捉えなおすテーマにアプローチするため、高等学校における応援団の教育的機能・役割に関する研究を行ってきた。今回はそのアプローチの一環として、応援団の応援技法における発声のあり方に焦点をあてる。応援団における発声は、その役務とも関連するほど重要な技量のひとつに位置づけられており、一般的に明瞭性、遠達性、迫力、感情表現といった価値尺度が存在してきたと考えられる（ヒアリング：本郷学園高等学校・熊谷高等学校・松山高等学校など）。日頃の発声練習や体幹トレーニングとの併合訓練などが行われており、熟達度の高低は存在するが、資質的要因が大きく具体的なノウハウが存在しないともいわれる。そこで本実験では、①熟達度による発声音の違いを明らかにする、②発声音による感情の違いを明らかにする、③発声訓練期間の違いによる成果要因を明らかにすることを目的とする。

実験はヒアリングした同高等学校応援団員4名と応援団未経験の大学生2名を対象に同一の応援フレーズの発生を求め記録する。その後、熟達度の長じる団員2名と熟達度の低い団員2名、そして、未経験大学生2名を比較し熟達度による発声音の違いを明らかにする。分析方法は、感情音声コーパスを用いて、ケプストラム分析と主成分分析による感情の判別をおこなう。

参考文献：丸山富雄「スペクテーター・スポーツの社会的機能に関する考察」体育社会学研究会『スポーツ参与の社会学』道和書院，1977年，214-218／高橋豪仁『スポーツ応援文化の社会学』世界思想社，2011年，8-10／庄司雄貴，安藤敏彦「ケプストラム分析と主成分分析による発声の感情分析」情報処理学会東北支部研究報告，2016年，1-8